いのちと地域を守る

仙台・荒巻小の避難所運営

意思疎通 難しさ痛感

――校長・大谷義昭さんの証言

2011年3月11日の震災当日、仙台市荒巻小（児童398人）に避難された方は約450人に上りました。予想外のことで、災害時の対応マニュアル通り対処する余裕はありません。やれることをやろうと覚悟しました。

地震発生時、学校にはまだ多くの児童がいて、速やかに校庭に避難しました。保護者に引き渡しをしているうち、住民が続々とやってきました。

避難所の開設場所は校舎4階の体育館と定めていました。でも揺れで設備が落下。高齢者や体の不自由な方々が余震のたび、体育館から校庭に移動するのは難しいと判断し、校舎1、2階に入ってもらいました。

避難者には発熱した子どもや乳幼児がいる家族、言葉が通じない留学生もいます。個別に部屋を用意し、妊婦には保健室を使ってもらいました。

最初の6日間、避難所は教職員と住民の金子俊光さん、熊谷紘一さんが、かかりきりで運営しました。

震災当日の夜から食事の配布を始め、理科室にあったろうそくを持ち出し、明かりをともしました。ろうそくは地元の輪王寺にも分けてもらいました。

飲み水用の屋上のタンクと下水道は無事でした。トイレを使用する際は「大便時のみ水を流す」というルールを決めました。水不足を心配し、プールからバケツで水をくんで流しました。

校舎からプールまで距離があります。手伝ってくれる人を募ると、10代後半くらいの若者が次々と協力してくれました。人から人へと切れ目なく、バケツリレーをすることができました。

問題もありました。「避難所にペットを入れたい」と言う人から、酒やたばこ、ガスコンロを持ち込み家庭科室で勝手に焼き肉を始める人までいました。言葉が通じない男性留学生が女子トイレに入ったことも。避難者との意思疎通の難しさを痛感しました。

教員として本当につらかったのは当初、児童の安否確認のための時間が、なかなか取れなかったことです。

震災4日目から3交代制にして、教職員を家に帰しました。7日目からは、PTAや荒巻学区民体育振興会の方々に避難所運営の手伝いを頂くことができました。

避難所を閉鎖したのは3月27日。避難所運営の役割分担やルールを、あらかじめ地域と話し合っておく必要性を感じています。

震災で停電したため、ろうそくをともして避難所を運営した＝2011年3月12日、仙台市荒巻小

支援の担当者を決めて

減災・復興支援機構理事長　木村 拓郎さん

参加した皆さんの大半は20年後、要援護者になる可能性がある。要援護者の問題は誰の身にも起こりうることを、まず地域で理解してほしい。震災で要援護者は何に困ったのかの具体例を共有し、認識を深めることが支援の第一歩になる。

要援護者の支援は個人情報の問題が絡む。福祉の知識も必要なので、自主防災組織に専門の担当者を置いてはどうか。最初から完璧を求めなくてもいい。時間を掛けて対策を考え、継続してもらいたい。

要援護者の実態については、地域が行政に先行して調べるべきだ。災害時の介助に関する意向調査を年1回は実施し、公平性を保ちつつ支援対象を選ぼう。本人が希望しない場合でも、別枠で支援対象として把握しておくことを勧める。

調査の際、支援する側の限界について誤解がないように説明しておく必要がある。支援する人や、その家族の安全が優先される事情などだ。

孤独死に備える意味でも、お年寄り宅を訪ねて、炊き出し訓練の汁ものを配ったり、家具の転倒防止策を施したりするなど、日ごろから地域全体の交流が重要だろう。

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域と人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。

第10回「むすび塾」は22日、宮城県南三陸町の歌津中で開催します。

■むすび塾に参加して――仙台・荒巻コミュニティ・センター

【避難所の運営】数日間は、学校長として避難所運営にかかりきりになった。倉庫にあった対流式石油ストーブは暖房はもちろん、湯を沸かしたり、乳児用のおかゆを作ったりと大活躍だった。
＝荒巻小・大谷義昭さん(60)

【参加して】近所に高齢者だけの世帯があり、震災時は妻や地域の人が面倒を見ていた。きょうはプライバシーの問題が議論に上ったが、緊急時は遠慮せずに踏み込んだ方がいい。
＝荒巻学区民体育振興会・星利美男さん(65)

【避難所の運営】学校では、インフルエンザにかかった人を離れた場所に移すなど教室の使い分けをしたが、地域の施設ごとに用途を決めて、使い分ける方法もあるのではないか。
＝荒巻小・稲葉俊一さん(51)

【児童の安否確認】地域では親同士のつながりで子どもたちの安否を確認できた。学校側から要請があれば、PTAの連絡網を児童の安否確認に生かせる。
＝荒巻小PTA・鈴木美千代さん(49)

【要援護者の対応】こちらが「してあげられる」ことと、相手が「してほしい」ことにギャップがあると感じる。どう埋めるかが課題だ。
＝荒巻民生委員児童委員協議会・雨宮節子さん(65)

【避難所の運営】水くみやトイレ掃除のボランティアを募集したら、若者が積極的に手を挙げてくれた。避難所ではなく周辺に住む大学生も来た。みんな一生懸命働いてくれて感動した。
＝荒巻地区社会福祉協議会・熊谷紘一さん(68)